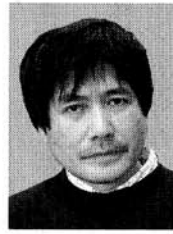


## 提言

鈴木 和次郎



奥会津地域には、原生的なブナ林を始めとする世界遺産級の自然環境が広範囲に残されている。その中核をなすのが、面積8万3500畝という国内最大の保護林として指定された「奥会津森林生態系保護地域」だ。金山町、只見町、檜枝岐村、南会津町の一部を含む只見川流域沿いの越後山脈南部一帯にあたる。さらに、一昨年発足した尾瀬国立公園や越後三山只見国定公園も含まれている。

この地域の自然環境を特徴

## 奥会津の水辺林保護①

独立行政法人森林総合研究所主任研究員。専門は造林学、森林生態学。人工林地帯での「集水域管理」を目指す技術開発に従事し、希少樹種の生態と保全技術の開発、自然林再生プロジェクトにも参加。

## 特異な環境育む溪畔林

づけるのは、日本有数の多雪地帯とその影響を受けた植生である。雪崩と雪圧によって、地表をえぐり取られた急傾斜と「やせ尾根」を持ち、その上に成立する森林が広大な面積で広がっている。このそそり立つような地形を「雪食地形」と呼ぶが、これが水河ではなく、多雪という環境のもとで形作られ、さらに比較的低い標高に成立していることも注目に値する。この荒々しい地形と厳しい環境の下に特異な森林植生が形成され、それが広大な面積で存在するこ

とは驚異的である。ブナ林は冷温帯を代表する自然林で、一般には土壌の深いなだらかな斜面に成立する。いわゆる「ブナ平」と呼ばれる地形である。しかし、奥会津の場合、ブナが優占し

生育する樹木と混在して分布し、そのサイズもずば抜けて大きなものとなる。この地域の景観を特徴づけるのは、雪崩によって山腹が削り取られて土壌の乏しい岩盤に張り付く草本植生、そしてミヤマナラやマルバマンサクなどの低木類からなる崩壊地植生である。さながら森林限界、あるいは、その上の高山帯の森林植生を思わせる景観を呈している。

そうした中にある、鋭く切れ込む谷が折り重なり、複雑な地形構造が形成されている。さらに、その谷底にも毛細血管のように大小さまざまな河川や溪流が流れる。この山地帯のV字谷の狭い谷底の「河川氾濫原」に成立する森林群集を「溪畔林」と呼んでいる。主要な構成樹種は、トチノキ、カツラ、

サワグルミ、オヒヨウ、イタヤカエデなどである。地味が豊かなこともあり、樹木は巨大に成長し、うっそうたる森林を形成している。

溪畔林は、奥会津地域の自然景観を構成する極めて重要な要素で、自然生態系の維持にとつての根幹を成す。それも広大な手付かずの自然環境を背景に存在することの意味は大きい。溪流釣りであれ沢登りであれ、樹冠に覆われ、直射日光が遮られた昼なお暗い溪流を進むのは幻想的であり、それこそ、残したい、守りたい豊かな自然である。

(次回は15日の予定)

◆ 豊かな生態系が残る奥会津地域。その環境形成に大きな影響を及ぼしているのが只見川流域などに広がる水辺林だ。水辺林が果たしている役割と保全の課題について語ってもらった。